



Title	国際交流：台北医学大学夏期研修でのボランティア体験
Author(s)	師井，佳奈子；菅，彩香
Citation	大阪大学看護学雑誌. 2015, 21(1), p. 37-39
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56765
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

国際交流：台北医学大学夏期研修でのボランティア体験

師井佳奈子*・菅彩香*

要旨

今回の台北医学大学との1か月間に渡る国際交流プログラムは高齢者ケアについて学ぶことを目的に企画され、講義や施設見学、遊びを通して多くの経験と学びを得た。特に学生達の学習姿勢からは、講義での活発なディスカッションを通して、学生間の相乗効果で全体としての理解をより深めることの大切さを学んだ。また、施設見学での通訳経験から、相手と真剣に向き合い伝えようとする姿勢を持つことがコミュニケーションでは大切だということに改めて気が付いた。

また、この1か月の学習を通して高齢社会が抱える問題の深刻さが共有できたのではないかと感じた。今後、世界的に高齢者数が増加すると予想されており、高齢者ケア問題は国際的に取り組むべき問題である。今回の交流を通して、高齢者の高齢者ケア対策を国際的な広い視点から議論し、共に取り組める可能性を感じた。

キーワード：国際交流、コミュニケーション、学習への姿勢、台北医学大学

Keywords: International Exchange, Communication, Attitude to Learning, Taipei Medical University

I. はじめに

台北医学大学：Taipei Medical University（以下、TMU）の看護学部の学生との国際交流プログラムは7月31日・8月31日に大阪大学で実施され、10人の学生がTMUから参加した。大阪大学からは、大学院生と学部生を合わせ、30人以上のボランティアが参加した。この国際交流ではボランティアとして多くのプログラムに参加し、TMUの学生と主に高齢者ケアについて共に学び、共に遊び、多くの刺激をもらった1か月間となった。

1か月間のスケジュールおよびボランティアの役割については、表にまとめた。（表1）（写真1）

表1. TMUのスケジュール概要

内容	ボランティアの役割
学び ・大学での講義（計7日） -日本の制度、高齢者を取り巻く現状、 -高齢者に対する取り組みなど ・8か所の施設見学 -ナーシングホーム、通所リハビリセンター、 -特別養護老人ホーム、地域包括支援センター、 -保健所、病院など	・施設への案内 ・施設見学内の通訳 ・講義のセッティングなど
遊び ・ウェルカムパーティー、バーベキュー ・京都や奈良への観光、信州への旅行 ・フェアウェルパーティー ・その他...	・企画、準備など

ボランティアとして参加した私たちの一番の目的として、自分の英語力を向上させたいということがあったが、TMUの学生との貴重な1か月間の国際交流ではそれ以上に、数多く

写真1. 講義の様子

のこと学んだ。その学びを深めるため、この1ヶ月間で得たものについて振り返りたいと思う。

II. 国際交流プログラムの実際

1ヶ月間の交流プログラムでは、講義や施設見学でのディスカッションを通して、台湾と日本の高齢者ケアについて互いに学んだ。例えば、施設見学では食事介助は時間がかかる見守ることが基本であり、できないところだけ介助していた。しかし台湾では介助が必要な患者には全て介助者が食べさせることが一般的とのことで、その違いに驚いていた。TMUの学生は、介助方法の意味を知り、日本の食事介助方法に興味を持った様子であった。その他にもTMUの学生は日本の高齢者ケアを学ぶ中で、日本の繊細で丁寧な気配りがなされた看護ケアや、地域のネットワーク、高齢者ケアにおけるボランティアの役割の重要性に驚いていた。

施設見学での通訳で施設職員の方の説明やケアに対する熱い思いを英語で表現することは非常に難しかった。しかし、日常生活や本人の意向に沿った支援への工夫や、高齢者ケアにおける問題点（人員不足、財政不足など）について施設職員の方が熱心に語る姿と、TMUの学生の学びたいという真剣な姿勢を目の当たりにし、自分も少しでも多くの事を伝えたいという思いになった。そこで、ただ言葉を並べて伝えるだけではなく、施設の方の説明を簡単な表現や具体例を使って

*大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻統合保健看護科学分野看護実践開発科学講座

細かく説明したり、ジェスチャーや漢字、スマートフォン、辞書など様々な手段を使ったりすることで英語力を補う工夫を行った。そのようにすることで、お互いがその状況を思い描き、伝えたい内容や表現を一緒に考えることができ、上手く英語で表現できなくてもイメージを共有することができた。話をしてみるとことと、伝えたいという思いを持つことがコミュニケーションでは大切であることを知った。

また、共に学ぶだけではなく、遊びもともに楽しむことで日に日に TMU の学生との距離も縮まった。TMU の学生とは同年代ということもあり、より一層深く交流することができた。8月末には、一人の院生の誕生日があり、TMU の学生と一緒にサプライズパーティーを企画した。サプライズを喜んでもらおうと、TMU の学生は、部屋の飾り付けをし、短時間で準備したとは思えないようなユーモア溢れる部屋を作り上げてくれた。先生方の協力もあり、サプライズは大成功となり、とても楽しい時間を過ごした。
 (写真 2)

写真 2. サプライズパーティー

III. TMU の学生の見習うべき姿勢：ディスカッションへの参加態度

TMU の学生の学習への姿勢には、互いに協力する姿勢、礼儀正しさ、何でも素直に楽しむ姿勢、など見習うべき点が多くあった。TMU の学生は積極的に意見を交わし、疑問点があれば質問をする場面が多くあり、学生間の相乗効果で理解を深めていた。施設職員の方とのディスカッションが盛り上がったため、急遽プログラムを変更してディスカッションを続けたこともあった。また、TMU の学生はどのようなことにも楽しんで取り組んでおり、この様な姿勢が講義や施設見学での積極的な学習態度や多くの事を学び取ろうとする柔軟性につながっていたのではないかと思う。

日本の学生同士では、授業の場で発言をしたり、ディスカッションをしたりせず、自己解決してしまう傾向がある。しかし、日本の学生も自分の意見を持ち、発言することに恥じらいを持たずに、

貴重な勉強の機会を最大限に生かして、どんな些細なことでも学び取ろうとする姿勢が必要である。

IV. コミュニケーションのあり方について：TMU の学生と施設の方々の交流を通して

通訳が介在しない場面でも施設利用者の方と TMU の学生が楽しそうに話をしたり、一緒に作業をしたりしていた姿を通して、コミュニケーションに向き合う重要性を感じた。言葉でのやりとりはスムーズではなかったが、お互いに相手の伝えたい事を何とか汲み取ろう、自分の言いたい事を伝えようと一生懸命コミュニケーションを取っていた。こうしたコミュニケーションへの姿勢自体が、言葉という形とはまた違った、ある種のコミュニケーションとして、関係性の構築につながっているのではないかと思った。具体的なエピソードとしては、「私が好きな歌を皆さんに、歌いますので聞いてください。」と TMU の学生に話しかけた施設利用者がいた。初め、TMU の学生は戸惑っていたが、その方がジェスチャーを交えながら繰り返し話してくれ、TMU の学生もその方が何かを自分たちにしようと察した様子で拍手をしてうなづいていた。その様子を見て利用者の方も笑顔になって歌を歌われた。

このような施設利用者の方と TMU の学生との関りを通して、言葉での流暢なやりとりだけではなく、相手の話を真剣に聞き、分かろうとする態度がコミュニケーションの基本として、大切であることを感じた。真剣にその人と向き合う姿勢が良い関係を築いていくというコミュニケーションの基本について今回改めて、気付くことができた。

V. 高齢者ケアへの期待：国際的な取り組み

TMU の学生の講義・施設見学でのディスカッションでの真剣に学ぼうとする姿からは、先に高齢化が進行し、問題が顕在化している日本の現状から、今後高齢化が進行する台湾でこれから深刻化していくであろう問題を予測し、台湾全体の問題として対策を考えようとする姿勢が伝わってきた。また、施設職員の方が課題の多い日本の高齢者の地域包括ケアについて、高齢者を見守る地域づくりの夢や自身がやるべきことを語った時に、通訳をする前に TMU の学生が「細かいことは分からないけど、言いたいことは分かった」と

話してくれたことは印象的であった。この1か月の学習を通して高齢社会が抱える問題の深刻さが共有でき、高齢者ケアへの危機意識と関心が高まったように感じた。今後、世界的に高齢者数が増加すると予想されており、高齢者の高齢者ケア問題は国際的に取り組むべき問題である。このような高い関心を持つ学生が海外にいるという事実を今回知ることで、高齢者の高齢者ケア対策を国際的な広い視点から議論し、共に取り組める可能性を感じた。(写真3)

施設職員の方々も、「これをきっかけにアジアとのつながりを広げ、日本でのケアを伝えていきたい。」「こういう機会が毎年あれば良いのに。」と話し、自分たちが熱心に

写真3. 施設での食事介助の体験

取り組んでいる日本での高齢者に対する取り組みを世界に発信できることに喜びを感じていた。また、日本のケアを伝えるだけではなく、台湾での高齢者への取り組みの現状も情報交換を積極的に行っていきたいという話をしていた。施設の方の国際交流に興味を示す発言を聞いて、現場レベルでの国際交流の実現の可能性を感じた。このような国際交流に関心を示す施設が増え、実際に各国が協同して高齢者ケアに取り組むようになることを願う。

VI. まとめ：国際交流のすすめ

今回、このように多くの学びができた理由としてプログラムを作り、招待した側の院生という立場で関り、日本の高齢者ケアを伝えるという、役割があったことは大きいと思う。その役割のために、ごまかしたり甘えたりするのではなく、自分自身に厳しくなれ、普通では飛び越えられない一線を越えて関わることができた。それが貴重な経験、学びにつながったと思う。国際交流は英語の勉強、文化の違う人との触れ合いというイメージであったが、人と人とが向き合う上で大切なことを学ぶことができ、さらに今後の国際交流への希望と興味をより一層強く持つことができた。

普段は、認知症をテーマに研究を進めており、自分の研究テーマにのみ視点が集中しがちだが、

今回のTMUのボランティアを通じ、日本の高齢者ケアの現状・問題点の全体像を再確認できた。今後は、高齢者問題の全体の自分の研究の位置づけを意識し、国際的な視点も含めて複合的な視点を持って研究を進めていきたいと思う。